

東日本大震災支援（平成23年7月21日～23日）

救命救急センター 江部 克也

最後の出動は、福島県の南相馬市でした。放射線のリスクは大きくないとはいえ、「やっぱり若い人には行かせられない。まず自分が先に行く」という英断で、看護副部長自ら出動するなど、班長もそれなりの年齢なのに、班長が一番若い？という珍しい救護班となりました。

原発事故で避難した住民の一時帰宅のために、避難区域である20km圏内ギリギリの場所に中継地点が設置されていました。そこに設置される救護所での活動が、与えられた業務でした。

中継地点として選ばれた場所は、馬事公苑という、普通であれば、のどかな公園といったところでした。蠅が多いのには閉口しましたが。

帰宅する住民は、バスで避難先から町内単位で運ばれてきて、中継地点で防護服を着て、線量計や連絡用の無線機を持たされ、あわただしく帰宅していくのでした。当時は、まだ一巡目であり、自家用車の使用は許可されておらず、防護服を着たままで、バスに乗って町内単位で出発していくのでした。

許可時間がすぎると、バスに集合して中継地点に戻ってきます。そこで、防護服を脱ぎ、放射能汚染がないことを確認してから放免されます。

自衛隊の除汚チームも待機していましたが、深刻な汚染はなかったようでした。

多少体調がわるくても、はじめての一時帰宅を逃すことはできないと、無理をしがちで、早朝か

ら朝食抜きで現場入りする人が多く、さらに防護服を着ていることで、暑さがこもるのだそうです。暑い時は熱中症が時々発生していたそうですし、不測の事態に対応するための救護所でした。

幸い私たちの担当した時期は、梅雨寒で、熱中症はほとんどありませんでしたが、帰宅前に全身けいれんを起こした方がおられ、近くの南相馬市立病院に搬送しました（発災の夜に患者搬送に向かった病院でした）。やはり、具合があまりよくないのに、がんばって帰宅しようとしたそうです。

帰宅する住民は一世帯あたり一枚のビニール袋が配られており、これに入るだけの私物は、汚染さえなければ持ち帰りが許可されていました。それぞれの家庭でもっとも大切なものというわけです。一人一袋ではなく、一世帯に一袋です。皆さんだったら何を持ち帰りますか？

目前に迫った夏のために衣類を、というのが一番多いようでしたが、つり道具とかゴルフセットという人もいました。要領のいい人は、同じような大きさの袋を用意して、上下からかぶせて、サーフボードのような大きなものを持ち出していました。

現場で手伝いにあたる電力会社の人に、詰め寄るような人もいるのかな？と思っていましたが、声高に抗議する余裕もないのか、皆黙々と帰宅し、また避難所にもどっていきました。現場に手向ける花束を持参する人もいました。見ていてつらかったです。

会場近くに、自衛隊の人たちが集めたもの、というランドセルや写真などを展示する建物がありました。ランドセルだけでも数十個ありましたが、ほとんど立ち寄る人はいませんでした。一時帰宅が忙しくて立ち寄れないだけで、元気で生きているんだよね、と祈りたくなるような光景でした。

原発から中継地点の南相馬市は20km圏外にあるので、生活している人も多かったようですが、空气中の放射能の濃度はそれなりに高いので、不便を承知で、宿泊は福島駅前でした。

放射線濃度は、新潟・長岡よりは、1ケタ高い状態でしたが、高校生などは普通に通学しており、以前よりは街の活気は戻っていました。ただ、ふとしたところに、「放射線濃度測定します」などという看板を出している店があったりするの、目をひきました。

福島市から南相馬市へは、全村避難となった飯館村を横切っていきました。同じような車も多いので、交通量自体はそれなりにあるのですが、周囲の店などは完全に閉まっています。路肩のお花なども、飯館村にはいるとプツリ途切れてしまいます。また、誰もいない村役場にも寄ってみました。「死の町」といって不評を買った大臣がいましたが、機能していない村であることに違いは

ありませんでした。

一番異様な光景は、田んぼでした。普通ならこの時期は田植えがすんだ田んぼで、緑の苗が風にゆれる、のどかな田園風景が続いているはずですが、しかし、乾いた地面に雑草が伸び放題で、なんともいえない光景が延々と続いていました。

あぜ道も雑草にうまりつつありました。数年たてば、ただの原っぱになってしまうのでしょうか。丹精をこめた田んぼが無に帰っていくのを見るつらさは、当人にしかわからないのですが、津波によるがれきの山とはまた違ったつらさがありました。

シニア救護班として、特に体調不良者ができることもなく、長岡に戻り、このチームをもって、東日本大震災に対しての救護班派遣は終了しました。

「また、ごいっしょしたいですね」というのは、被災者の方々に対しては不謹慎な言い方ですが、追い詰められた状況の中で、この人となら、このチームとなら、また一緒に仕事がやってみたい、と考えられるような救護班ばかりでした。

いろいろと苦勞をかけたと思いますが、いっしょに出動してくれた救護員の皆様、また、後方支援をしてくれた皆様、送り出してくれた職員の皆様に御礼申し上げます。

南相馬で一時立ち入り避難住民の救護活動に参加して — 手入れについて考える —

医療安全推進室 山崎 時子

7月21～23日、福島県南相馬市の「原発事故避難住民の警戒区域への一時立ち入りに対する救護活動」に参加する機会を得た。江部(克)先生、中川師長、笹井課長、県支部の鶴巻課長、山崎の1個班で、班長が一番若いという平均年齢の高い構成であった。被ばくの危険性と救護の内容からこのような人選に至った。

第1日目は福島県支部で被ばく関連の説明等を受けた。第2日目、福島市内の宿舎から車で1時

間程行くと山間の飯館村にさしかかった。周りは田園地帯であるが、田畑は高く草が生い茂り、皆この光景に「あーっ」と言葉を失った。山の自然はそのまま美しいが、手を入れて整備したところに手が入らなくなった姿は哀れで悲しい。長年手入れをしてきたこの土地の住民たちの田畑を耕したくともできない気持ちを思うと切なく、原発事故の恐ろしさを身に染みて感じた。このような人たちが震災後4か月ぶりに初めて我が家に一時

帰宅してくるのであると肝に銘じた。

1時間半程で救護所のある馬事公苑に8時半到着した。救護対象者は、一時帰宅者309名（小高地区バス16台、富岡地区バス5台および担当作業員）と翌日の浪江町一時帰宅者272名（バス16台）であった。主な活動内容は、出発前の問診票の回収点検・相談と戻られてからの救護であった。パンなどの軽食が用意され、糖尿病、高血圧などの慢性疾患の薬の飲み忘れがないか確認して回った。出発前にめまい意識消失で倒れた50代の男性を南相馬市立病院へ血管確保して搬送したが、地震後から意識消失を起こすようになったとのこと

であった。曲り尺を持った70～80代と思われる老夫婦は、小屋の窓が壊れているので直してくると出かけられた。防護服をまとい、体力的に心配したが無事に戻られた姿を見てほっとした。70～80代の女性は、伸び放題の草取りをしてきたが、膝が痛いと言われ診察を受けた。ズボンの膝の部分は泥で汚れていた。「そうでしたか」と話を伺いシップを貼付してお帰りいただいた。草取りを一番にされたこの女性の気持ちを思うと胸が痛んだ。

短い関わりの中での心のケアの重要性と対応できるスキルの向上が課題と考える。

救護活動が教えてくれたこと

5 B 中川光子

2011年7月22～23日(土)南相馬警戒区域の一時帰宅住民に対しての救護活動に参加した。南相馬市馬事公苑内の体育館に小高地区、富岡地区、浪江町地区の住民が集まった。バスで各地区に向かって、自宅で短時間過ごす、警戒区域内なのでキャップ、マスク、手袋、ガウン、膝までの足カバーを着用した。夏場なのでビニール製のそれらを全て身につけることは、蒸れて暑苦しいことこの上ないことは想像に難くなかった。住民の方たちは1～2人/家族で、家の状況を見て、必要なものを持ってくる算段をして集まって来られた。「いくつくらいの袋に入れられるの？」その質問に何度か出会った。夏の衣類や、思い出の写真、趣味の釣竿、子どものぬいぐるみ等、少しでも多くの荷物を持って来たいだろうなあと考えた。慣れない仮設住宅や異郷の地では普段の品物で心が慰められるものである。

東北の夏に、こんな涼しい日があるのだろうかと思ふに思ふような過ごし易い日だった。皆さんはしっかり荷物を握って、係の説明を聞き逃すまいと固い表情で座っておられた。ご高齢の方は緊張に耐えられない様子であった。無理もないと思ふ、看護師としての役割を果たさなければと、自宅から帰られた時の様子に一層こころ配ろうと、思いを新たにされた。歩行の様子、足取り

の力強さ、肩を落としているか、顔色、汗、表情があるか、問いかけに応じているか、その他全身から感じ取れる様子、などを考えながら帰りのバスが到着する度に降りてくる方たちに目を配った。ホットゾーンで放射線量の測定中の様子、一般エリアでの腰掛け方、話し声など、私は全身を触覚にして右往左往していた。〴〵さむい夏はオロオロ歩き…、宮澤賢治の詩を思い出し、オロオロと歩いた。その時に会った御二人のことをナラティブ風に書き、状況を少しでも伝えたい。

猫をなくしたAさん

カラのキャリーを持ちAさんは、会場に戻って来られました。車椅子に腰掛けるなり、ウワーッと泣かれました。カラのキャリーだったことを見ていましたが、直ぐに駆け寄ることが出来ませんでした。車椅子に乗っていただく時に私はやっと傍に行くことが出来ました。もしかして、カラのキャリーだったから、猫ちゃんはもしかして…。血圧と先生の間診を聞いて、たいしたことがなさそうだったので「猫ちゃんは？」って思い切って聞いてみました。Aさんは小さい声でダメだったと言われました。「ああ、そうだったんだね」と肩を抱かせてもらいました。出発前にAさんとお話させていただいていた時には「4か月前だから

ね…居たら連れてくる」と気丈の印象のAさんでした。お年の割りに身体が大きくてしっかり者でいらっしやると見えました。Aさんは「猫は家の中で死んでいた。墓を作って埋めてきた」と小さな声でお話しされました。一生懸命耳を済ませて私は聞き、何か一言を、元気になれるような一言を言えたら良いなあと考えました。`分かります、元気を出して…、と心の中で「思い」と「言葉」が交錯しました。「猫ちゃんは家の中にいてくれたんですね」と、言葉を選びました。Aさんはうなずかれました。家の外で亡くなったらAさんは探せないかもしれない。Aさんと猫ちゃんの絆があったってことを伝えたいと思いました。しばらくしてAさんは「大丈夫だ」って言われ、身体がしゃんとしたように見えました。Aさんからのパワーのようなオーラのようなものを感じられ、救護所に戻った時のAさんとは違って見えました。

家の草取りをして足を引きずってきたBさん

Bさんは会場に戻って帰って来られた時、足を引きずっていました。少し腰が曲がって、右手を膝に置いて右足を引きずって歩かれました。これはおかしい！声をかけて車椅子で救護所に来てもらいました。血圧がちょっと高く、先生の診察を受け、足にシップ貼ることになって、名札を見たら、泥でよごれていました。もしかして「草刈しましたか？」って聞いたら、うんとうなずいて笑われました。なんとなくいたずらを見つけられた子どものような表情で、「ちょっとしかできなかった、なんもできなかった」背丈を越す草に果敢に挑戦して足が痛くなるほど草刈したんだと思いました。野菜を育てていると草は敵のように見えますので、農家のおばあちゃんなんだと察せられ

ました。小柄で80歳くらいのBさんに「新潟では稼ぎ症っていうんだよ」って軽口で話したらまた笑ってもらえました。

《今後の私の対策について》

大地震と原発事故、放射線汚染はいつもの日常を奪った。自宅に自由に帰れず、住めなくなっただけでなく、さらに日本の農業も危うくさせた。南相馬市馬事公苑までの途中行程に飯館村を通った当初、何も植えられていない田んぼは減反なのかなと思った。しかし、見渡す限り草茫々の田んぼと畑が広がっていた。すぐにここは全村避難の飯館村だったと気がついた。朝8時なのにカーテンもドアも閉まったままで、歩いている人が誰一人いない。たくさん草と沈静な空気の中で、グラジオラスの赤い花が目染みるように鮮やかだった。長岡の緑の風吹く田んぼや色とりどりの花々の風景との違い、人の手が入らない野性の自然だった。

山の迫ってくる地域では、開墾して何年も何十年も、何百年もかかって一枚一枚田んぼを作ってきた。冷害の時も豊作の時もあったはずである。お米は日本人の主食だが、日本国民全員に行き渡るようになったのは戦後のことである。それまでは白米だけのご飯はご馳走。麦や雑穀をお米に混ぜて、日本人は生きてきた。

飯館村には今後いつ田植えが出来るのか。背丈を越す草が物語って、私の心に残った。この体験から以下の3点を私の今後の取り組みとする。

- ・自然環境を大切に、花を育てる。
- ・日本の農業に関心を持ちTPPに反対する。
- ・自分のペースで社会貢献する。

原発事故避難住民の 警戒区域内への一時立入に対応する救護

社会課 笹井吉郎

南相馬市での「福島第一原発事故避難住民の警戒区域内への一時立入り者」救護班としてH23年7月、H24年3月と活動した。

①平成23年7月22、23日

〔医師1、看護師2、主事2〕：

避難住民は避難先から中継基地に集合後、専用バスで出発し警戒区域内の自宅から必要物品を持参し中継基地に戻る方法で実施された。福島駅至近の宿舎から南相馬市〆馬事公苑、(4か所の中継基地の1つ：日赤担当)まで片道1時間30分ほどの間に、通常の生活から一転、時が止まったかのような光景(特に7月での全村避難の飯館村では)を目の当たりにした。

馬事公苑では、一時帰宅する住民に対し、「受付」「荷物を預かる」「防護服・線量計・トランシーバ・腕時計を渡す」「飲料水・軽食を渡す」「持ち帰り品を入れるポリ袋を渡す」「専用バス乗下車に付き添う」など、マンツーマンで東京電力関係者が対応していた。その他にも厚労省、経産省、文科省、原子力安全保安院、大学(放射線)、自衛隊、警察、消防、自治体が対応・待機していた。

1日目の対象者は南相馬市179世帯309名。2日目の対象者は浪江町158世帯272名であった。

7月末の高温時期に防護服を着用した住民の方々に対し、長岡を出発する段階では熱中症の心配をしていたが、22・23両日とも車中から見た道

路上温度表示で20℃に達しないくらいと杞憂に終わった。(7/22…足のシビレ、高血圧、頭痛等6名。7/23…後方搬送1名、虫刺され、貧血、高血圧、棘等11名。)

②平成24年3月7、8、9日

〔看護師2、主事2〕：

日赤2ブロック担当の2～3月は冬季の雪道運転を配慮され、宿舎から〆馬事公苑、まで地元福島赤十字病院の職員により送迎頂いた。多忙の中、時間を割いていただいたことに感謝したい。一時立入りプロジェクトも第3巡目となり、一時帰宅はマイカー利用のドライブスルー方式が主となり専用バスによるものは少なかった。

防護服着用も希望制となり体育館内は閑散としていた。ただ手伝いスタッフは地元住民の雇用の場となり、多くの人たちが一時帰宅者への対応や場内整理、清掃などに当たっていた。

1日目の対象者は浪江町111世帯155名。2日目の対象者は南相馬市32世帯47名。3日目の対象者は浪江町90世帯133名、南相馬市3世帯3名であった。(3/9…腰痛に対し湿布薬投与1名)

福島県に滞在中4日間で装着した個人線量計の合計値は9～10 μ Svであった。原発事故避難住民への救護活動は長期に亘るが、息の長い支援が必要である。